

鈴屋翁畧年譜

全

121

メートル
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
タイトル番号：0070

書名：鈴屋翁略年譜

1冊



鈴屋翁畧年譜序

先公の遺稿を整理し、
その大要を採りて、
其の略年譜を編む。
此の略年譜は、
先公の遺稿を整理し、
その大要を採りて、
其の略年譜を編む。
此の略年譜は、
先公の遺稿を整理し、
その大要を採りて、
其の略年譜を編む。

カ Penmanship (Calligraphy) の
重要性は、文化の発展と
コミュニケーションの
重要な手段として、
歴史的に認められて
います。この分野は、
個人の表現力と創造
性を高めるのに役立
ちます。また、書道
の練習は、集中力と
忍耐を鍛えるのに
効果的です。現代の
デジタル時代でも、
手書きの文字は、
デジタルフォントに
代わることは出来
ません。したがって、
Penmanship (Calligraphy) の
重要性は、今後も
変わらないうえに、
ますます高まると
考えられます。

海を渡る船は、昔は飛ぶく物から始ま
り、遠征の道具として大いに用いら
れていました。この船の発明は、
人類の歴史に大きな転機を
もたらしました。船の発明は、
人類の活動範囲を大幅に
拡大し、異なる文化と
人種との交流を促進
しました。また、船の
発明は、貿易の発展
にも大きく貢献し、
世界の経済を活性化
させました。現代の
船は、高度な技術と
設備を備え、安全で
快適な旅を提供して
います。したがって、
船の発明は、人類の
発展に不可欠な要素
の一つとして、歴史に
刻み込まれています。

かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの

かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの
かゝるお尋ねは誠に宜しうございませう。又、お尋ねの

おはせしるる程に御事なされ
もふりしりとなす事なすりしり
見しむしりとなす事なすりしり
あやあやなすりとなす事なすりしり
しりとなすりとなす事なすりしり
すりとなすりとなす事なすりしり
すりとなすりとなす事なすりしり

勢になすりとなす事なすりしり
すりとなすりとなす事なすりしり
文政十二年五月廿日
五月の日江戸の永田町の
屋敷

村田春門

志るん

代毫

兼原千足

鈴屋翁略年譜

世系

延曆御後平高望朝臣裔權大納言賴盛卿六世孫

平建卿

本居縣判官

武遠

兵部大補

武秀

兵部大補

直武

左馬助

武基

民部少補
至于武連代
屬北島家

武之

和泉守

武貞

左馬亮

武延

左衛門尉

武重

左馬亮

武利

兵部大補

武連

摠助

延連

正右衛門
屬蒲生氏卿卿

武秀

左兵衛
屬氏卿卿

某 家号改小津 二男 七右衛門

某 三右衛門

定治 三右衛門 本生小津喜共衛某長男

定利 三右衛門

定治 三右衛門 本生小津孫右衛門某子

宜長 為定治嗣 家子復本居 春庵 中衛

母村田孫共衛豊尚女勝子

鈴屋翁畧年譜

享保 十
五

五月七日子刻紀伊殿の知^りえす伊勢國飯高郡松坂里にて生じ
り^し小津畧之助と稱す

十六

二歳

十七

三歳

十八

四歳

十九

五歳

二十

六歳

元文

七歳

二

西村某を師として手習を始めふ

八歳

三

九歳

四

十歳

五	寛保	<p>田七月廿四日父定利主淑らまぬ ○字を弥四郎と改まふ 名を兼貞と付まふ○夜後松菊小従ひて手習ひ ○岸江之仲ふたよりて四書を讀始め又猿樂の謡曲を 習ひたまふ</p>	十一歳
二		七月因ありて大和國吉野峯坐水分神社に詣てまふ	十三歳
三			十四歳
延亨		十一月廿一日元服しるまふ	十五歳
二			十六歳
三		此頃より尋常風の秋をとりて始まふ○七月より濱田 瑞聖を師として射を學び○又某小茶湯の式を向ひ ○殿は正住院小就て五經を讀早まふ	十七歳
四			十八歳
寛延		四月五日旅立ちて近江の多賀太社小詣九日ころ京へ上 る北一日の頃大坂へ下り北五日伏見宇治を経て京へ去る 五月三日朝鮮人の京の籠城を觀多し四日京を去り六日 松坂へ歸りまふ	十九歳

寛延大...

二		二十歳
三		廿一歳
寶曆	<p>二月廿八日兄定治江戸まで没らる子なきよりして大人 家を嗣ぎまふ○三月江戸へ下り七月十日江戸を去り さへ富士峯に登り廿日家へ歸りまふ</p>	廿二歳
二	<p>三月物學ひは京へ上りま川堀景山を師として儒 道を學びひまひ景山八禎助と稱て其先祖正意とつて 其より綾小路室町の南なほ家へ寄宿し居り ○此ころ家号小津をやめて本居と復し たまふ</p>	廿三歳
三	<p>九月字を健藏と改まふ</p>	廿四歳
四	<p>五月典藥武川幸順法眼の弟子と成て小児科の匠術を 學ひその室町の南の家へ寄宿し居り</p>	廿五歳
五	<p>三月名と宣長字を春庵と改まふ 但中より春字を辭 書りまふ</p>	廿六歳
六	<p>契沖が著せる百人一首改觀抄古今餘枚抄勢語臆断等を 見て始て古学の志を起し居りまふ</p>	廿七歳

○鈴屋翁年譜

○三

七	七月京より歸りて小児科の醫を業とし始りて其の秘傳を母刀自の意なりとて○賀茂真淵翁の著されたる冠辭考を見ますしく古学の志を定め終ひたる也	廿八歳
八		廿九歳
九		三十歳
十		卅一歳
十一	真淵翁伊勢大和山城より歸りて江戸へ歸りて松坂小一夜宿屋に終へるをりて又まうて古学の旨を問ひききたまひつひは名流を進りて弟子とならぬ此の志をく書通はりてとの學ひ志あり真淵翁今年六十五歳	卅二歳
十二	伊勢阿濃津人草深玄弘が女を娶りて○因四月母刀自勝子信濃の善光寺に詣りて尼ぶらさぬ	卅三歳
十三	二月三日長男健藏春庭主生	卅四歳
明和	著述 石上私淑言既成 卒後 刻 ○千 枕既成 寛政三年刻 ○古今選既成 卒後刻 ○六月 紫文要領成 占事記傳の稿を始り	卅五歳

二		卅六歳
三		卅七歳
四	正月十四日二男恭次郎春村生	卅八歳
五	正月朔日母刀自没らさぬ	卅九歳
六	十月晦日師真淵翁七十歳して卒すといはぬ此翁の蓬萊雅樂に贈られし書中云松坂舜庵も清面談之由方子清庵侯も未学業不弘復何とを宜くあれしやね候まや	四十歳
七	正月十二日長女飛驒生	四十一歳
八	直毘靈紐鏡等既小成 今年刻	四十二歳

○鈴屋翁暮年譜

○四

安永	三月五日旅立して吉野の紀行 菅笠日記成 <small>後年</small> 小序 <small>アヨ</small>	吉野の紀行 菅笠日記成 <small>後年</small>	三月五日	四月	五月	六月	七月	八月	九月
二	正月二日二女美濃生	正月十日字音假字用 格成 <small>五年</small> 刺成	正月十日	正月十五日	二月晦日 駁我慨言成 <small>改</small> 八年刺	二月	三月	四月	五月
三		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
四		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
五	正月十五日三女能登生	正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
六		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
七		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
八		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
九		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月
十		正月十日	正月十日	正月十五日	二月	三月	四月	五月	六月

天明	此頃より家の名を鈴屋と号けり	正月十六日真淵翁十三回忌 追慕の哥集千向草成 <small>後年</small> 九月十日真曆考成 <small>寛政元年</small>	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
二		正月十六日	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
三		正月十六日	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
四		正月十六日	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
五		正月十六日	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
六		正月十六日	正月十六日	二月	三月	四月	五月	六月	七月
七	三月やむごころなきあまの 同せりよふりて玉匣を 題する書をより既し著し 並れつる玉匣をバ別巻と して添へてより	正月 國號考既成 玉鉞百首詠既成 今年刺後年大平至 解を著刺成 十二月 秘本玉匣成	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
八		正月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
九		正月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
十		正月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月

○鈴屋翁各年譜

○五